

プロローグ

女は両手を背中にまわし、ブラジャーのホックをはずしにかかった。ほっそりした腕と長い指が恥辱に慄えているのがわかった。ショートカットの艶々した金髪もこの闇のなかでくっきりと浮かびあがっている。月のでていない夜のとばりが運動場と呼ばれるそれほど広くない刑務所の中庭をつつんでいて、高さ約五十フィートほどある監視塔の投光器からの、ただ一筋のサーチライトがこのストリップをうつしだしていた。

女はすでにパンティとブラジャーのみの半裸になっていた。プロポーションの素晴らしい身体は若々しく、贅肉などひとつもついていないかのようである。ホックがかすかな音をたててはずれると、同時に女の肩がすぼまり、首をうなだれながら両手で胸を押さえこんだ。

彼女を取り囲むように、六フィートを越える大男が三人、警棒をぶらつかせガムを噛みながら脂ぎった視線を真っ白な女の背中にねめつけていた。三人とも髪は刈り上げで七三分け、半袖のうすいグレーのシャツも黒いズボンもきっちり、揃いのユニホームである。彼らがこの刑務所の看守であることははっきりとわかった。

女が胸を抱いたまま躊躇をみせていると、その中の一人がヒュッと口笛を鳴らした。女は諦めたようにブラジャーを地面へ滑り落とした。背中をまるめ、今度はパンティのゴムに指をかけると、それをずりおろしていく。プリンとしたヒップがあらわになった。小ぶりだがゆで卵の白身のように柔らかそうで弾力のある尻肉である。ウエストの締めりから下半身のまるみが見事にシェイプアップされている。臀筋はひとつのゆるみもなく双臀をもちあげていた。そのため、肉のボリュームのわりには谷間は深く感じられ、スレンダーな肢体にメリハリをつけていた。

女が腰をかがめ、膝を抱えこむようにしてパンティを足から抜く際に、太腿の付け根からヘアの華がわずかに覗けた。皓々とした照明を浴びたそれはショートカットの知的な頭髪と同じく鮮やかなブロンドであった。熱い視線をその部分に痛いほど感じたらしく、パンティをブラジャーの上に落とすと、女はすぐさま両手のひらをいっぱい広げてヒップの狭間を覆った。

生まれたままの姿になった女の背中に再び口笛が飛んだ。こちらを向くようにという命令である。女はジリジリとその場で回転していく。横向きになった途端、ヒップを隠していた両手は股間にかぶせられた。そのまま肩をこれ以上無理と思われるほどすぼめて、胸を二の腕で防御した。真っ赤に上気した顔をはっきりと下げ、全身

で羞恥心をあらわしながら女は男たちに正面を曝け出した。

必死の努力にもかかわらず、乳ぶさのほとんどはあらわであった。わずかにトップだけが腕の下にあったが白い乳肌に蕩けてしまいそうなピンク色の可憐な乳暈はその半分以上が顔をだしていた。腕を寄せているので乳ぶさもむっちりと寄り添い、肉を密着させている。ヒップと同様に小ぶりだが形がよく、男好きする姿だ。首筋から胸もとにかけて顔の赤さが染みだしてきたように火照っていた。

「いつまで頭のとっぺんをこっちに向けているんだっ。貴様の醜いツラをみせてみる。114番！」

看守の一人が夜の静けさを破るようにガラガラ声でいった。

「グズグズするな、114番！ 俺たちはボランティアではないんだぞ。好きでこんな時間まで貴様につきあってるわけじゃないんだ。家では女房も子供も待っている。インバイ如きはその幸福をふみにじる権利はない。さっさと夜のお散歩をやり終えて籠のなかに戻るんだ。わかったか、114番！」

きついアルコールでつぶしたと思われる声が一言一言屈辱を押しつけてくる。女は喉元まででかかった抗議の言葉をぐっと呑み込み、唇を噛みしめながらいわれたとおりに顔をあげていった。紅潮した顔はやや瘦れてい

た。大きなコバルトブルーの瞳は充血し、目元が弛んだ感じになっている。それが本来のこの女の目元とは思えない。澆刺とし勝ち気な美貌をそのまま寝不足にした顔であった。化粧っ気がまるでないのもそんな様に拍車をかけていた。ボーイッシュなショートカットもブラッシングを何日もしていないようにパサパサしている。

彫りの深い顔には知性が滲んでいた。しかしその知性はおそらくこの理不尽な暴力と権力にはまるで無力なのだった。夜とはいえ野外でスポットライトを浴びながら男たちの目の前でストリップをするなどという恥辱を与えられると、女の知性はチリチリとタコ糸で締めあげられたように身動きできなくなってしまう。頭が怒りと悔しさで硬くなり、このまま気絶してしまいそうだった。

「なんだ、その顔は114番。また文句をいいたいのか」

看守はそういうとニタリと嗤った。他の二人も追従の笑みを浮かべる。反抗の言葉を口にすればどんな罰が与えられるか、もうお前にはわかりすぎるほどわかっているはずだ、と看守たちの表情は物語っていた。

「……いいえ……何の文句もありません。サー……」

慄える声でそれだけいうと女はまたうなだれてしまった。

「では走ってこいっ、114番！ 今日特別、五周オマケしてやるぞ！ 狭い籠に一日中入っていたんだか

らな！ たっぷり運動しなくちゃ身がもつまいとこの所長のお気遣いだ！ さあ、全部で十五周、全力疾走だ！」

看守はやおら警棒を振りかざすとかなりの勢いで女の尻肉にぶち当てた。肉の弾ける鈍い音がした。灼けるような痛みがジーンと皮膚に滲んだ。女は股間を押さえたままとぼとぼと走りだした。サーチライトがそれを追いつき、へっぴり腰の滑稽なジョギングを延々と照らした。

コンクリートをひきつめた中庭はそれでも一周 四分の三マイルはあった。三周もしないうちに呼吸が乱れだし、汗が全身を伝いだした。五周を終えたところで股間を押さえて走る余裕を失って両手を力なく振り出した。交錯する太腿の合間に逆三角形型の茂みが見え隠れした。尖端の突起をツンと上向かせ、乳ぶさが弾んだ。顔面の紅潮はすでに羞恥心の発露ではなく、肉体の燃焼によるものだった。若い女の甘い体臭に誘われたように無数の羽虫が彼女のまわりを旋回し、隙をみつけては肌に体当たりしている。

十五周目をヨタヨタになって走りぬぎ、ゴールラインを通過すると女は男たちの足元へ倒れこむように転がった。ハアハアと荒い息になずみ、肩を大きく喘がせた。大量の汗が全身を濡らしている。ブロンドの下の頭の地肌にも、肋骨をうっすらと浮かせふいごのように波打っている脇腹にも、小さめの口のまわりにも、透明感を漂

わせた清楚な太腿の内側にも、汗はべっとりと貼りつき、光っている。飛びかっていた羽虫の数匹が背中や二の腕にへばりつき、小さなストローを伸びださせてそれを舐めていた。羽虫ならずとも白い肌が上気し艶かしい体臭を香らせている丸裸の女体が眼前に横たわっていれば、男がどんな感情を催すか、何の説明もいらない。

三人の看守はほぼ同時にベルトを緩めだした。そして間髪を入れずに股間のファスナーを下げおろした。

女は絶望的な気分で顔をあげたが、下半身が裸になっていく看守たちに悲鳴すらあげなかった。

女は観念したように瞳を閉じた。

監視塔のライトが消え、辺りは漆黒の闇が支配した。

電子的なリンガー音が寢室の静けさを震わせた。やむことなく鳴り響くベットサイドのコードレスホンへ、ぐずぐずと蠢きだした薄いブルーのタオルケットの塊から白い腕が突き出され、伸びていった。繊細な肘から先につづいて、成熟した女だけがもつ脂が適度についた上腕部が露出する。長い指をもった手が何度か受話器を探り、ようやくそれをつかむと、腕はまたさっとタオルケットの塊のなかへ引っ込んだ。

意味不明の寝呆けた短い声が聴こえた。

「ええ」と次の返事では発音に明瞭さが甦りつつあるようだった。

「……そうですね。私がジャクリーン・ドーセット弁護士。サラ・ドーセットは私の妹ですが……」

タオルケットがさっと翻り、その下に隠れていた女の、バストから上があらわになった。ベットのなかでは裸体でいるのが習慣らしく、豊満な乳ぶさがブラインドの隙間から差し込んでくる月明かりに青白く輝いている。

「……すみません。もう一度、お願いします。そちらのお名前は……」

肩まである金髪を掻きあげてジャクリーンは懸命に事態を理解しようと努めている様子だった。電話の脇にあったランプにスイッチを入れると、ボールペンのキャップを矯正のいきとどいた白い歯で啜え取り、メモしはじめる。

「はい、エド・ローエン弁護士ですね。テキサス州クライズヒルズ郡、え？ テキサスから、ですか……」

いけない、まだ寝呆けているわ、とジャクリーンは目をパチクリさせた。むっちりとした丸い肩と小首を傾げた顔に受話器をはさみ、メモを取りだすと、しだいに頭がはっきりしてきた。頭がはっきりするにつれ、ことの重大性も明らかとなってきた。

受話器の向うのローエン弁護士は声からしてかなりの年配のようであった。事務的なその口調からは精気が感じられず、自分の役目を大過なく終えることだけが生き

がいのような小官吏の雰囲気がある。今、かけている電話も実はまったく不本意な余計な手間であって自分としては必要性を感じていないのだ、といった苛立たしさが露骨であった。しかし彼は弁護士である。一介の雇われ代理人にすぎない。自分の本意ではなくとも依頼人の要請には応じなければならないのだ。エド・ローエンの依頼人は強くマサチューセッツ・ボストンの弁護士ジャクリーン・ドーセットに連絡するよう指示したのだ。その依頼人こそはジャクリーンの妹、サラ・ドーセット、彼女の唯一の肉親である最愛の妹だった。

「サラが……妹がどうかしたんですか」

我ながらぬけた質問だと思った。どうかしなければわざわざ弁護士がこんな時間に電話してくるはずもないのである。

次のローエンの答えはそれを実証した。はるかに悪い形で。

「サラ・ドーセットは現在、クライズヒルズ刑務所で服役中です。麻薬不法所持の現行犯で二年の実刑でした」

「まさか……」

「いいえ。私が弁護を引き受けたのだから間違いありません」

ローエンは律儀に念を押した。ジャクリーンは肉感的な下唇をなめる。職業柄、どんな事態にも冷静に頭脳を

働かせる習慣を身につけているとはいえ、彼女が次に発した言葉はどこにでもいる身びいきの姉妹のそれだったかもしれない。

「私の妹が麻薬なんかするわけがありません。何かの間違いですわ」

ジャクリンは少々勝ち気だがサラの愛くるしい顔——最後に会ったのは彼女の大学の卒業式のときだから、かれこれもう二年前である——を思い出しながら、やはりそういわずにはいられないのだった。顔だけではない。正義感の強い性格はおよそ麻薬とは無縁である。たしかにハイスクール時代は悪戯心でちょっと試してみるようなことはあったかもしれないが、それだけだ。彼女の人となりとは現代アメリカ社会の最大の病巣とは相容れないものなのである。

受話器の向うでローエンのため息が聴こえた。

「お身内の方のとまどいはよくわかります」と心のこもらない慰めをかけてきた。「しかし残念ながらこれは事実ですな。紛れもない事実です。あなたの妹さんはコカインを常用しているヒッピーの乱交パーティの会場で、踏み込んだ警察に現行犯逮捕されたのです。二カ月前に判決が下り、当地の刑務所に収監されたのです」

それまでは綺麗な英語だったのが急に訛りが目立つようになってきた。とくにヒッピーという時代遅れの言葉には軽蔑とかすかだが憎悪の色合が滲んでいたような気

がする。

「二カ月前——どうして私に連絡がなかったのでしょうか、ローエン弁護士？ ただ一人の家族ですよ」

「ご質問はごもっともですな。ミス・ドーセット」

と、ローエンはいったが、少しばかり気にならなくもない。

(ミス・ドーセット？ どうして私が未婚であることがわかったのかしら)

ジャクリンは半年前のロナルド・スチュアートとの離婚劇を苦い感情とともに思い起した。まさかそれをローエンが知っているとは思えない。サラにもまだ報せていない事実なのだ。だからローエンはエチケットに従って、『ミス・ドーセット』か、あるいは『ドーセット弁護士』とするべきであった。もっともそれはフェミニズムの浸透した東部においての常識で、封建色の強い中西部、それも郡部ともなれば無理な話かもしれない。ジャクリンはムツとはしなかったが、ローエンの政治的な立場を表すひとつの証左として心にとめておくことにした。

「しかしそれを妹さんは望んでおられなかったのです。もちろん私は説得しましたがね。当然のことです。身内の涙は陪審員に大きなインパクトを与えるのはあなたもよくご存じでしょう。いくら社会的に地位のある姉に迷惑をかけたくないという思いやりとはいえ、利

口なやり方ではない」

しかしそれでもおかしい。警察が犯罪者の家族に連絡を取らないのは普通考えられない行為である。ローエンの説明には腑に落ちない点があったが、それ以上尋ねることはやめにした。サラが囚われの身になっているとすれば、かの地——クライズヒルズとかいう、おそらく保守的など田舎——で、彼女が味方として頼れるのはこの無気力な老弁護士しかいないはずだ。彼を怒らせるのは得策ではあるまい。

「わかりましたわ。サラは麻薬を不法所持していた、逮捕され、刑務所で服役中、そういうことですね。つづきをどうぞ、ローエン弁護士」

ローエンは咳払いをして痰を切った。

「ありがとうございます。あなたの冷静さに感謝します、ミス・ドーセット。——裁判中、どんなに私が諭してもあなたを呼び寄せることに反対していたサラだったのですが、ここへきて急に里心がついたようなのです。私が昨日面会に行くとボストンの電話番号を教えました。無理もないでしょうな。裁判の最中は何かと外部との接触も多いわけだが、鉄格子のなかはまったくの孤独です。しかもサラは——こういう言葉を使っていいのであれば——他所者ですから。おわかりでしょう？ お姉さんの面会を心待ちにしていますよ。毎日泣き明かしているようです」

「そうですか……」 ジャクリーンもそれっきり声がでなくなった。改善されているとはいえ、やはり刑務所の待遇は劣悪である。ジャクリーンの心に幼い頃のセピア色の映像が甦った。あどけない幼年期、生意気ざかりのジュニア・ハイスクール時代、初めてパーティ用のドレスを着たときのサラの笑顔、そして両親を交通事故でなくした大学一年生の夏、立派なレディに成長したサラは葬式の時も毅然として悲しみに耐えていた……。

「もちろんお伺いしますわ」 ジャクリーンは嗚咽を押さえ付けるようにローエンにいった。「明日いちばんでそちらへ向います。クライズヒルズの位置をもう一度正確に。ええ、ヒューストンの西方四百マイル……」

ボストンからのフライトにはなんの問題もなかった。デルタのジャンボ機はほとんど揺れずに飛行をつづけ、ヒューストン国際空港に着陸した。機内でジャクリーン・ドーセットは電話をかけまくった。慌ただしくたったものだから、勤め先の法律事務所にも連絡が遅れたのだ。事務所には身内の不幸で一週間、ボストンを離れるとだけ説明した。彼女が担当していた『ナンシー・スペンサー対DCケミカル社事件』——典型的な会社ぐるみのセクハラ事件——はほぼ示談の段取りがつき、あとは残務整理程度だけだったので同僚が引き継ぐことになった。

サラの一件を報告しなかったのはむろん弁護士活動に支障があるといけないからだ。妹がヤク中である噂——事実であれなんであれ——が広まれば依頼人のあらぬ疑念を呼び起こすことにもなりかねないし、蛇のような検事たちの知るところとなれば法廷の場での攻撃の材料にもなりかねないのだ。うかつに情報を洩らしてはいけない。伏せておくに限る。この一件が今後どうなるか、それはまずサラの顔をみてからの話である。

ヒューストンでレンタカーを契約し、ハイウエーを一時間ほど走ったところまでは、さらにほとんど問題はなかった。レンタカー会社の脂ぎった配車係が彼女の美貌と豊満な肉体の線にあからさまな目付きを送ってきた以外は、ホンダの調子もすこぶるよかったし、都会育ちの彼女には珍しい砂漠地帯の風景も楽しませてくれた。

ところがハイウエーをおりて、一般道をメキシコ方面へと向いかけた頃、突如、クーラーの調子がおかしくなった。

「なによ、これ！」

ジャクリーンは片手でハンドルを操りながらクーラーのスイッチを入れ替えてみたが、すぐにモーター音すらしなくなった。外はうだるような暑さなのだ。まだあと数時間はドライブをつづけねばならない。その間に狭い日本車のコクピットはサウナ地獄と化すに決まっている。しだいに苛立ってきてガシャガシャと指でボタンを

押すことに飽き足らず、しまいには拳骨で殴りはじめたが、どうやら状況を認めねばならないようだった。

「こんなことなら韓国車にしとけば良かったんだわ！」

悪態をつきながらジャクリーンは早くもじっとりと滲んできた額の汗を拭った。今日の彼女はあの鮮やかな金髪は頭の後ろでひっくるめ、深い湖を思わせる瞳は大きなサングラスで隠していた。紺色のノースリーブシャツに下はジーンズの出で立ち。ちょっと見には東部の辣腕女弁護士とは想像できないだろう。あの配車係——ヒスパニック系の中年男——がジロジロとみた、たわわにふくらんだ乳ぶさは、日頃は小さめのブラジャーでギュウギュウに押し潰している。とくに法廷に立つときはそうだ。巨乳はとかく魯鈍の代名詞だし、女性陪審員の反感を買いかねない。本気で胸を小さくする手術を考えたほどである。

しかしボストンから遠く離れ、四百マイルのドライブともなれば身体を締め付ける必要もないし、締め付けるべきでもない。ジャクリーンは空港のトイレで着替えし、ノーブラになった。好色な男ならずとも垂涎の視線をねめつけてくるのは当然なのだった。

その胸もとにも不快な汗がまとわりつきはじめている。ほっそりとした首筋から鎖骨の辺りに玉の汗が光り、大きく開いたすべやかな胸もとはほんのりピンク色

に火照っていた。このままではシャツが肌に貼りつき、乳ぶさの紡錘形のまるみが露出するに違いない。昂奮していなくとも形よく突起している彼女の乳首はすでに薄い生地を透して、存在を主張しはじめているのだった。

窓を開けてもまったく意味がないどころか、逆効果であった。顔に吹きつけてくる風はまさに熱風。それも顆粒に近い砂を含んだざらざらした風なのだ。見渡すかぎりの茫漠とした荒野と、はるかかなたに峰をつらねている赤茶けた山々はギラつく太陽にうだり、輪郭を滲ませているようでもあった。

「クライズヒルズ……」 ジャクリーンは憎々しげに呟いた。妹を幽閉した土地の名前は陰鬱に響いた。エド・ローエン弁護士から電話を受け取ってから、ジャクリーンは何度も推理をたててみた。まず、現在、フロリダの出版社で働いているはずのサラがどうしてそんなところにいたのか。ローエンは言葉を濁して答えなかったのので、デルタの機中でジャクリーンは出版社に電話を試みた。応対に出たサラの上司はまったく当惑していると語った。事件は知っていたが、判決が出る前に彼女は社に辞表を送り届けている。どうやら会社はエド・ローエンを仲介してサラに辞職か解雇か、二者択一を迫ったようだった。

「彼女は優秀でしたよ」と元上司は感情を押し殺していった。「それに勇気もあった。しかし今回はその勇気

が裏目に出たのだと思います」

彼はサラが独自の調査を元にしてあるコミュニンのレポートをものにしようと焦っていたのだといった。

「コミュニン？」

「そう。過激なエコロジー思想に感化された連中ですよ。都会を捨て、山深い里で自給自足の共同体を営む、まあ六十年代の学生運動をひきづっている元闘士がリーダー格のようですが、サラは、いえ妹さんはそこに現代社会の一断面をみたらしい。狙いは悪くありませんが、行きすぎでした。彼らと行動をともにするうちのめり込んでしまったのでしょう」

そのコミュニンがクライズヒルズ付近の山中に生活の場を選んだらしいのだ。ローエンがヒッピーと唾棄するように呼んだ正体である。

会社としてはこれ以上、かかわりあいになるのは御免だというのが、言下にありありと滲みでていて、ジャクリンは苦々しく電話を切らねばならなかった。

サラとクライズヒルズはこうして結びついたのだが、彼女と犯罪はどうしても結びつかない。あの賢い娘がいくら仕事にのめり込んだとはいえ、コカインパーティ——ローエンは乱交といったが——にまで参加するはずはないのだ。いや参加したとしても、それは取材のためであり、麻薬をやったりセックスにハメを外すなど、考えられない。やはりこれは何かの間違いではないか、と

ジャクリーンは思いはじめていた。コミューンの連中に罪をかぶせられたのか、あるいは警察のでっちあげか、どちらにしても冤罪の線は捨てきれない。

（ああ、可哀相なサラ！ 私が最初から付き添っていれば少なくとも刑務所に入らずに済んだかもしれないのに）

そして美人弁護士は忌ま忌ましげにエド・ローエンの声を思い出した。無能な弁護士を雇った被告の運命ほど悲劇はない。それで人生が百八十度変わってしまうくらいだ。わずかな弁護士料を惜しんだばかりに、あるいは国選の運が悪かったばかりに、人生の取り返しのつかない時期を高い塀のなかで暮らすハメに陥ってしまう。サラはたぶん最悪に近い弁護士に当たったに違いなかった。

（待っててよ、サラ。すぐに助けにいったやるから）

アクセルを踏むジャクリーンの足に力が入る。ホンダの車体はトースターのように熱せられ、それはクーラーの働かなくなった車内の温度を急速に高めている。汗は顔を流れ、あごにしたたり、胸もとを這って、シャツの衿ぐりに流れこんだ。水をこぼしたようなシミがシャツ全体に広がり、案の定、双乳のフォームがくっきりと浮き出てきた。

ジャクリーンはしきりにシャツを掴んで扇ぐように揺らし、身体に空気を送り込んでいるが焼け石に水といったところ。こんなものは脱いでしまいたかったがさすが

にそういうわけにもいかない。サングラスを外し、眼に流れこもうとする汗を何度も拭いた。もちろん下半身も同様の状態であった。いや、もっとひどいはずである。パンティはヒップの皮膚と同化して密着してしまっている。いま、ジーンズを下ろせば薄いナイロンの生地を透して汗をたっぷり含んだブロンドの陰毛がみえてしまうに違いなかったし、こんもりとうすら隆い恥丘とそれにつづく女肉も、構造を露出するほどになっているはずだ。半年前、ロナルドと別離れて以来、セックスからは遠ざかっていたが、ときおり一人寝の寂しさを紛らわせる淫らな行為に没頭し、前夫からも指摘されたとおり、濡れやすい体質の彼女のプッシーは芳しい蜜でべとべとに下着を汚すことはあった。しかしいまはきっとそれどころではなく、失禁した状態のようにになっているだろう。ピンク色の女陰——三年の夫婦生活を経ているのに、ジャクリーンのそこはまだちっとも黒光りしていない——も濃厚な体臭にムセ返って不潔にうるんでいる。

ジャクリーンはクライズヒルズに着いたら真っ先にエド・ローエンに連絡し、サラとの面会に向うつもりであったが、その前に熱いシャワーを浴びなければどうしようもないだろうと思った。汗の臭いをプンプンさせた東部の女——しかも美人弁護士ときてる——が闊歩すれば田舎の町が大騒ぎになるのは受け合いである。

美しい夕焼けのショウが幕を閉じる頃、ジャクリー

ン・ドーセットはクライズヒルズに到着した。

行政区域の境界線を示す看板に簡単なクライズヒルズの市勢が載ってあったが、それにとると人口一万人弱、中心産業は農業と林業、典型的な中西部の田舎町といったところだ。

とりあえず宿を探さねばならない。彼女はハンドルを切って Honda をガソリンスタンドに入れた。軽快なカントリーミュージックが安っぽいスピーカーから流れている。音が割れて聞き苦しい。ステーションの窓にはカーテンがかかっていたが、まさかもう店仕舞いはないだろう。三十秒待っても従業員が出てこないでジャクリーンは軽くクラクションを鳴らした。

(畜生っ、なんて今日は暑い日なのよ！)

日が暮れても温度も湿度もいっこうに下がらずムシムシとしている。スタンドの室内で人影が動いた。カーテンがかすかに開き、こちらを覗いている。影はゆっくりとドアへ向った。出てきたのは白人の中年男。従業員のユニホームを着ているので営業中なのだろう。コレステロールをこってりとたくわえこんだ腹が垂れ下りズボンのベルトが隠れてしまっている。生欠伸を噛み殺しながら男は近付いてきた。

ジャクリーンは窓を下ろして顔をだし、「満タン、お願いね」といった。男は彼女の顔をみるとギクリとして立ち止まった。ブラウン管やスクリーン以外で、こんな

美女を挿んだ記憶がないといった顔つきである。子供のようにまじまじとみつめられて、さすがに居心地が悪くなり、ジャクリーンは繰り返した。

「お願いします。満タンよ」

男はようやく我に返りのそのそと注入ノズルを取り出して給油口に突き刺した。回転式の数字が動きだし、ホンダに命が吹き込まれる。

汗まみれの身体を男のぶしつけな視線に晒すのは忍びなかったが、四百マイル、ぶつつづけで窮屈な運転席に同じ姿勢を取りつつづけていたのだ。外で大きくのびをする誘惑には勝てなかった。

二の腕と胸もとがあらわなノースリーブ美人が車をおりると、男は生唾を飲み込んだ。しかも、バストはペントハウスのグラビアの女たちのように巨しく、ジーンズのヒップはパンパンに貼りつけて高い位置で揺れている。両手を頭上にかかげ、爪先立ちになって背中を反らせると、乳ぶさは胸の筋肉にひきつられてそのトップを小気味よく上向かせるのだった。剥き出しの挟れた腋窩には生汗が光って、ぶつぶつとした毛根が目立っていた。

男はこの滅多にないチャンスを有効に使おうと、給油管をそのままにして、タオルをもって移動する。埃っぽい車体を磨きながら違う角度から女の肉体を観察する。頭の後で束ねているブロンドはゴムをほどいたらきっと

あの肉感的な肩まで垂れるのだろうかと思つた。

（そうしたらもっとセクシーになって、俺はそれだけで爆発だぜ、間違いなく）

ジャクリーンの死角に入ったのを幸いと、男はだらしなく口元を歪める。助手席の窓を拭き、ドアミラーをこすって、男はジリジリと接近していく。するとジャクリーンの体臭が鼻をくすぐってきた。かぐわしい女の汗の匂いだ。思わず陶然としてしまう。いきなり押し倒して姦ってしまいたい衝動にかられた。ズボンの前はもう痛いくらいに硬くなっていた。

「ところでひとつきいていいかね、お嬢さん」

屈伸運動をしていたジャクリーンは慌てて振り返った。男はすぐ背後にきていた。手にしていたワイパーを意味ありげにこすっている。

「ン？」

「どのくらいミルクを飲めばそんなデカパイなるんだい？」

そういつて男はニタツと嗤った。一瞬とまどいの表情を見せたジャクリーンだが、

「私も聞いていい？」と切り返し、ニコリと微笑む。

「どのくらいハンバーガーを食べればそんなにお腹がでてくるの？」

こんな、やったりとったり、なら法廷で場数を踏んでいる弁護士のお手のものといったところだが、自分の下

らないジョークを他人に押しつけ、他人の優秀なジョークにはムツとするのがユーモアのない人間の常。男もそんな人種らしく笑顔をやめてワイパーを折らんばかりに扱きたてている。

「アメリカ車にすればいいんだ——」男は吐き捨てるようにいった。「いまどき、ジャップの車に乗る奴の気が知れねえ」

ジャクリーンが無視しているので車を拭き終えた男は無言のまま満タンのガソリンを注入して自動的に停止しているノズルを引き抜き、代金を請求する。

ジャクリーンは紙幣を何枚か渡して尋ねた。

「ところでこの辺りにホテルはないかしら」

「俺を誘惑しているのかね」

「よしてよ。熱いシャワーが使えてベッドがあるだけでいいのよ。冷蔵庫もテレビも必要ない」

「ベッドとシャワーがありゃ十分だ。今夜は天国の気分が味わえるぜ」

ジャクリーンはやれやれといった顔をしてお釣りを彼の手に握らせた。チップにしては多い額だろう。

「早く休みたいだけよ。四百マイルもクーラーなしの車を運転してきた人間の身にもなって頂戴」

男がまた何かいおうとして口を開きかけたが、視線がジャクリーンから離れて背後へと泳いでいった。ジャクリーンも振り返る。一台のパトカーが道路を折れてスタ

ンドに入ってきた。屋根のうえのランプが音もなく明滅している。

疑惑の土地

パトカーから二人の警官がおりてきた。一人はスタンドの男よりも一回り肥満体で、ジャクリンよりも背が低い。もう一人は若造だ。彼らは胡散臭そうに Honda をみやりながらこちらに歩いてきた。

「何か問題があったのか」デブがいった。

その見下すような物言いにいくらかカチンときながらもジャクリンはとりあえず笑顔をつくった。ことによると彼らがサラを逮捕した張本人たちかもしれない。いまは素性を知られないほうがいいだろう。

「いいえ、ポリス、何の問題もありませんわ」

しかし警官たちは怪訝そうな表情をしただけだった。そしてデブがもう一度いった。

「何か問題があったのか、グレッグ？」

警官はどうやら従業員に尋ねたらしい。ジャクリンは内心苦笑したが、改めてここでは自分が異邦人であって警戒されるべき存在なのだと思い知らされた。

「どうってことないよ、ウィリアム」

ウィリアムと呼ばれた男は露骨に不快な表情をした。

「仕事中はファーストネームで呼ぶなとっているだろう、グレッグ。いい加減にちゃんとしてくれないか」

「ああ、悪かったな。どうってことないよ、ヒギンズ保安官助手」

助手の部分を一際、強調して、グレッグはニタついた。

「ヒギンズ万年保安官助手といったほうが正確かね」

ウィリアム・ヒギンズの表情がさらに陰しくなった。二人の言い争いを無視して若造のほうはさっきからジャクリーンをジロジロと眺め回していた。それが警察官の特権であるかのようになんのてらいもなく値踏みしている。

どうやらホテルの所在をたしかめる風向きでもなくなったと、ジャクリーンはホンダへ戻ろうとした。するとグレッグとやりあっていたヒギンズがくるっと振り返って、「待ちなさい」ときつい声をかけてきた。と同時に若造の手がジャクリーンの細腕を掴んだ。

「なんですか？」二三步引き戻されながら女弁護士は驚いて声をあげた。

「逃げる気かね？」とヒギンズ。

「逃げる？」意外な言葉に彼女の美しい眉根が寄った。

「おや、ホテルの場所はいいいのかね」グレッグがまたニタニタしている。「このお嬢さん、いま俺に宿をどこ

にしようかと尋ねていたのさ」保安官助手に向って説明した。

「答えも聞かずにいこうとしたわけだ。我々の制服をみた途端」ヒギンズはすっかりジャクリーンに向き直り、その赤ら顔をしかめている。

「保安官——」と慎重に言葉を選んで、ジャクリーンはつづけた。「勘違いをなさっていますわ。お二人の仲がよろしいようなので私は気を使ったんです。ホテルの場所は公衆電話ででも探せばいいのですから」

そういうと、まだ腕を掴んではなさない若造の手をふりほどいた。彼女の二の腕に爪のあとがくっきりと凹んでいた。

「逃げたわけじゃありません」

「私にはこそこそと逃げだそうとしたようにみえたがね。ハリー、お前はどう思う？」 ヒギンズは若造に尋ねた。

「ええ、保安官。僕にもそう映りましたよ。ずっと観察してましたがね。我々をみると顔色が変わったような感じでした。汗もびっしょりですし」

「馬鹿馬鹿しい！」思わず声を荒げるジャクリーンだ。「汗くらい誰だって掻くでしょう。こんなに暑いんだから。私は失礼しますよ。長旅の疲れを癒さないと」

ジャクリーンはそのままぐるりと彼らに背を向け、歩きだした。

「動くな！」ハリーと呼ばれた若造の身体に緊張が走った。今までとは比べものにならないくらいの緊張感の漲り。ハリーは腰のガンベルトにぶらさがっているホルダーから拳銃を抜き出し、ジャクリーンの美しいブロンドに狙いを定めた。ジャクリーンはギョツとして立ちすくむ。ハリーの眼は、お前は一線を踏みこえたんだぞ、といているようだった。

「手を頭のうえへ！ 早く！ ゆっくりとだ！」

ジャクリーンはとまどいの微笑みを漏らしかけ、助けを求めるようにヒギンズとグレッグのほうに顔を向けた。ヒギンズはさきほどより難しい表情になっていて、ハリーの行動を不当化しようとするつもりはないらしかった。スタンドの給油マンにいたっては銃口を突きつけられた美女の驚愕と忿懣をニタニタと楽しんでいる。

「グズグズするな！ 牝豚！」

ハリーの行動と言動はどこか芝居じみていて、これがやりたいばかりにこの職業についたのだ、と傍目にもすぐわかった。

（狂ってるわよっ）心の中で罵りながら、ジャクリーンはゆっくりと両手を頭へもっていく。汗ばんだ腋窩が晒された。細腕が後頭部で組まれ、くの字に曲った。豊かなバストがそれにつれて位置をあげ、さらに上向きに尖端をツンとさせた。

「後を向いて足を広げるんだ！ 馬鹿な真似はする

な。ハリー様のリボルバーがお前の脳味噌を狙っていることを忘れるんじゃないっ」

ハリーの声はますます精気を帯びてきているようだった。仕事柄、不快な目にあつたことはこれまでもたびたびだったが、こうも露骨な不法行為に遭遇するのは初めてである。ジャクリンは反撃の機会——もちろん暴力的にではなく、法律を盾にした正当な権利の主張だ——をうかがいながら命令どおりに従つた。背を心持ちそらし、両足を一メートルほどの間隔に開けば、ジーンズにぴっちり包まれた魅惑的な臀部がブリブリと蠢いた。

「保安官っ」とハリーは視線をジャクリンに置いたまま、ヒギンズにいった。「逃亡を図ろうとした不審者の身柄を確保しました！」

手柄を親に報告する子供のような単純な誇らしさが感じられた。

「うむ、ハリー。上出来だ。日常の訓練のたまものだな」とヒギンズはいい、靴音をさせて近付いてきた。グレッグの、喉を震わせるようなひねこびた笑いが聴こえた。

「保安官。これはどういうことですか。すぐに拳銃をひっこめさせてください。もちろんこれは……行きすぎですよ」

ジャクリンはこみあげてくる憤怒を必死に押さえながら、努めて冷静に言葉を発した。

「行きすぎなもんかね。お嬢さん。職務質問中に警察官の制止を振り切って逃亡しようとしたんだ。二十年前なら撃ち殺されたって文句はいえないさ。ま、今だってあんたの肌がもう少し黒けりゃとっくに頭蓋骨に穴が開いてるよ」そこで唾をぺっと吐き出し、「ハリー、凶器を所持していないか、ボディチェックしろ」と続ける。

グレッグが今度は声をたてて嗤った。

「ハリー、これだからやめられんな。ポリスはよ」

ひやかしを無視して、ハリーは慎重にジャクリーンに手をのばした。明らかに昂奮している若者の鼻息を肩越しに感じながらボストンからきた美人弁護士は大きく深呼吸する。怒りで頭がチカチカする。落ち着こうと思っても膝が慄えた。

まず男の手が剥き出しの腕——そんなところに何を隠せるのだろう！——に触ってきた。ハリーの手のひらは不気味なほどの熱を孕んでいた。変質者の熱だ。頭に組んだジャクリーンののびやかな腕を撫でながら、しだいに下へおりていく。二の腕をさすり、肩をさすり、腋の下までスルリとさすりあげる。さすがに武者震いがおきる。鳥肌がたった。

「ハリー、ぬかるなよ。おっぱいの谷間に何かを潜ませてるかもしれねえぜ」

グレッグの下劣な合いの手をヒギンズが手を振ってたしなめた。

「これはれっきとした職務だぞ、グレッグ。レイモンド巡査は忠実に職務を果たしているだけだ。親愛なる納税者のためにな」

しかしハリー・レイモンドの手つきははっきりと豊満な肉体を感じていた。汗でびっしょりと濡れているノースリーブシャツの背中を二度三度とタッチしていくと、ムチムチした肉付きが跳ね返ってくるのだ。くびれた腰をそのラインに添って、まるで秘宝の壺を慈しんで磨くように這わせた。

あまりのおぞましさにジャクリーンはうっと息をつめる。これはまさしく痴漢行為であった。ボディチェックなどは軽くポンポンと触っていけばいいものではないか。思わずこの若造の股間を蹴りあげてやりたい衝動にかられたが、依然として頭に突きつけられているリボルバーが彼女のうかつな抵抗を押さえこむ。唇を噛みしめ、屈辱に耐え忍ぶ以外にない。

ハリーの手がお尻の丸みを撫で回してくると、ジャクリーンの腰はそれを避けるように右に左にふらついた。はいていたのが厚手の生地ジーンズだったのがわずかな救いだ。それでも双つの臀をたしかめるように、そしてその間の谷を探る淫猥な指の動きにはハラワタが煮え繰り返る思いだった。

しかしなんとも刺激的なダンスだ。グレッグは軽口をやめてゴクリと生唾を飲み込んだ。この美人のヒップの

なんと見事な成熟ぶりよ。この場で丸裸にしてこの手でいやというほどスパンキングしてやったらどんなに気持ちいいだろうか。

ハリーの手は未練を残しながら腰を離れ、すらりと長い下肢の搜索に移る。片足ずつ、上から下へ丹念に触った。内腿、ふくらはぎ、足首とどれもがシェイプアップされていて、硬く引き締まっていた。

女体の裏側のチェックがおわると、今度は下から這い昇っていくように前へのタッチが始まった。さすがに股間はさっと通過しただけだったが、それでもジーンズのファスナーの上を男の指が動いていくのだ。指は陰部のかすかな起伏を感じたに違いない。全身の産毛がそそけ立つ恥辱に女弁護士は両頬を紅潮させる。やや贅肉をのせはじめた下腹をねっとり撫で回されると、衣擦れの音が耳に入った。昂奮して荒くなっている呼吸に大きく喘ぐ感触をその手は楽しんでいるのである。

スッと指が乳ぶさの下縁に触れてきた。しかもハリーは己れの身体をジャクリーンに密着させるように寄り添わせてくる。強姦されているような感覚にとらわれ、眩暈がした。ハアハアと犬のような息が耳元に吹きかかってくる。乳ぶさの丸みをなぞるような指は左のそれを一周し、さらに8の字を描くように右のふくらみも一周する。手のひらが開き、ツンと浮き上がったトップをスツ、スツと軽くこすった。

最後に顔面をペロリと撫であげて屈辱のボディチェックは終了した。

「大丈夫です。保安官。危険物の所持は認められません」

ハリーは昂奮さめやらない声でヒギンズに報告した。

「よし、パトカーに乗せる。署まで連れていくんだ」

ヒギンズの言葉にすぐさま反応を示したのはレイモンド巡査ではなく、ジャクリーンだった。彼女はとらされていた姿勢を崩し、勢いよく振り向いた。

「どういうことっ。私が何をしたというのっ。なんで警察にまでいかなければならないのよ！」

カッと眼を見開き、両手を差し出すように抗議するジャクリーンの剣幕に男たちは一瞬、呆気にとられた。

「ずいぶん生きのいいお嬢さんだ」とヒギンズは柔らかく微笑みながらいった。「同行を拒否するというならここで緊急逮捕して、手錠をかけて連行してもいいんだよ。だがそんなことはしたくない。この静かなクライズヒルズの夜をできるだけそっとしておくのが我々の役目だからな」

彼の諭すような語り口にジャクリーンは氣勢をそがれたが、それでも彼らの言いなりになる気はなかった。

「こんなことで逮捕したらそれこそ不当逮捕だわ。ただ車にガソリンを入れにきただけでしょう。そこの従業員に聞いてみればいい。素晴らしいクライズヒルズの法

律は許すわけがないはずよ」

「ガソリンを入れにきただけ？」グレッグが肩をすくめた。「そいつは正確とはいえねえな。ガソリンを入れにきて、それからホテルがどこにあるかきいたんだ。そして俺にチップにしては多すぎる額の金を渡した。ウインクして腰を振りながらさ」

「嘘をいわないでよ！」

「お嬢さん。大きな声をださんでくれ。私はレディのキンキン声は好かんのだ」ヒギンズは顔をしかめながら制する。「で、何が嘘なのかね。ホテルがどこにあるか聞いたことはないというんだね？」

「いえ……それはその通りですが、ウインクなどしてませんわ」

「駄目だな、お嬢さん。するとガソリンを入れに立ち寄っただけというあんたの話は正確じゃないってことじゃないか。嘘をついているのはやはりあんたじゃないのかね」

「嘘だなんて。昂奮して忘れただけですわ。スタンドで道を尋ねたり宿を聞いたりするのはごく自然なことで、罪に問われるようなことじゃないでしょう？」

「もちろんその通り。だから今、あなたを逮捕するわけではない。しかし小さな嘘が大きな嘘の尻尾の場合もある。昂奮して何かを忘れたり、記憶の辻褄があわなかったりするの、普通の人間にもままあることだが、犯

罪者にはそれが顕著なのだよ。そのへんの見極めが警察官の仕事としていちばん難しいわけだ。こういう小さなタウンのいいところは住民のほとんどが顔見知りで普通の人間だということがわかっている点だな。たとえばこのグレッグ。しょうしょう気が荒くて品性下劣だが——まあまあグレッグ、そうむきにならないで——嘘つきで犯罪者でないことは私はよく知っている。子供の頃からみているからな。しかしお嬢さんのことは何もしらん。他所者だからな。それに警察の制服をみたら急に逃げようとした。だから署まできていただいて色々話を聴こうというわけだ。普通の人間か犯罪をしでかすような人間か、それでわかる。もちろん普通の人間とわかればすぐに解放する。素晴らしいこのクライズヒルズを満喫していけばいい。ただそれだけの話だ」

（ただそれだけ？ 冗談じゃないわよ——）

ジャクリーンはむっとしながらも口をつぐんだ。ヒギンズの屁理屈に納得したわけではない。彼らのこの行動——他所者に対する過剰な攻撃性——が妹の事件になんらかの繋がりがあるのではないかと思いはじめたからだ。それならば彼らに付き合うのもあながち徒労ともいえまい。この保守的で抑圧的な警察組織の正体を暴くことができればサラの冤罪——ジャクリーンはとっくにそう結論づけていた——を晴らす端緒につけるかもしれなかった。

「いいですわ。保安官助手」ジャクリーンは皮肉めいた笑みをこぼした。「御供しますわ。どこへでも。あなたたちは私を、私はあなたたちを理解するために努力しましょう」

ジャクリーンはきびすを返すと自らパトカーに向かって歩きだした。ハリーが慌てて彼女の腕を掴もうとするがそれを反射的に避け、あっという間にパトカーの後部シートに乗りこんだ。

「いいのは顔だけでないようすな。頭もとびきり回転が早いようだ」

ジャクリーンの横に座ったヒギンズがいった。運転席のハリーがサイドブレーキを外して車を発進させた。

「車のことは心配せんでもいい。後でハリーが取りにくるから」

窓を覗いているジャクリーンにヒギンズがいった。

「また来いよ。お嬢さん。ガソリン、安くするからさ」

スタンドマンのグレッグの嗤い声が聴こえ、そしてすぐに背後へ遠ざかった。

十分足らずのドライブでパトカーは警察署に到着した。署といっても二階建のこじんまりとした建物で警察よりドラッグストアのようである。日頃、大都会の警察署を見慣れているジャクリーンは思わず微笑を漏らした。

中へ入ると受け付けのカウンターに中年の女がいるだけでひっそりと静まり返っていた。ヒギンズとハリーは彼女と何事か会話をかわした。女はチラッとジャクリーンを横目でみ、陰気な表情を向けてきた。

「さ、こっちだ」ヒギンズは廊下の奥を指した。ハリーは外へでていった。ホンダを取りにいったのだろう。

案内されたのはガランとした一室。取り調べ室だが、窓には金網も鉄格子もなく圧迫感はない。ジャクリーンはそれでも警戒心は緩めず、勧められた椅子に腰をかけた。ヒギンズが向い側に座り、ノートを広げる。

「まず名前だ、お嬢さん。それに住所と年齢も」

ジャクリーンは躊躇した。本名を名乗るべきかどうか。サラ・ドーセットと同じ姓をきいて彼らはどんな反応を示すのだろうか。不審と警戒のマントを羽織って容易に尻尾をみせなくなるのではないだろうか。しかし名前を偽っても嘘はすぐにバレてしまうに違いない。所持品検査でもされればイチコロだ。免許証は車の中である。ジャクリーンは正直に答えることにした。

「ジャクリーン・ドーセット。三十歳。職業、弁護士……」

反応を盗みみる。ヒギンズはメモをとる手を休めたがそれは彼女の名前よりも職業の影響であるようだった。

「弁護士……」

彼は反復し、まじまじとジャクリーンをみつめた。ほ

とんどの男性がそうであるようにヒギンズもその職業とジャクリーンの美貌——それに豊満な肉体も——とを結びつけようと苦労しているようだった。ドーセットの姓にはひっかかりはないのか。かすかな狼狽の色を期待していたジャクリーンはやや拍子抜けする。しかし無関心を装っているだけかもしれない。つづいて赤ら顔の保安官助手の観察に眼を凝らした。

「弁護士バッジは見当らないようですが」

ヒギンズは『若者に説教する大人』といったそれまでの態度を一変させ、慇懃な上目遣いで彼女をみた。

「もちろん車のトランクのなかのスーツケースにありますわ。あなたの優秀な部下が今こちらに運んできているはずでしたね。別にいつも付けているわけではありません」

ヒギンズの表情には困惑がありありと浮かんだ。相手が弁護士と知っていれば署まで連れくることはしなかったのだ。面倒になったぞ、訴えられたらどうする？ そんな自問自答がつづいているようにみえた。

「どこからおいでになったのです？」

「マサチューセッツ・ボストン」

東部の大都会の名がますます彼を萎縮させたようだった。

「クライズヒルズにはお仕事で？ それとも観光ですか？ ドーセット弁護士」

「少なくとも観光ではありませんわ。仕事——になるかどうかはまだはっきりしません。一両日中にはわかるでしょう」

ジャクリーンはすっと癖なく高い鼻を蠢かせる。ほつれ落ちてきたブロンドをかきあげる仕草が痺れるような色っぽさだ。

「さ、さしつかえなければどういうことか教えて戴けませんか。警察として何かお役に立てることでも」

「さあ、それもまだわかりませんね。こちらの弁護士エド・ローエンに会って、しかるのちに妹に面会してからのことです」

「エドに？ 妹さんがこちらにご滞在なのですか？」

「正確にはここの刑務所にですわ。ヒギンズ保安官助手」とここでジャクリーンは相手の表情をみすえた。

「サラ・ドーセットというのが妹の名前ですわ。ご存じかしら？」

「サラ・ドーセット……」

ヒギンズは呻くように呟いた。ポケットからタバコを取り出して火をつけた。毛むくじゃらの指が細いフィルターを挟み、口から離れる。白い煙とともに濃いニコチンの臭いが室内に充満する。タバコをもつ手は明らかに震えていた。

「知っているらっしゃるようですね」

ジャクリーンが問い正そうとしたとき、部屋のドアの

外が騒々しくなった。荒々しく扉がノックされ、返事もきかずにどっと開け放たれた。ハリー・レイモンドが駆け込んできた。手にもっているのは白い粉がつまったビニール袋……。

「保安官、大変です。車を調べたらこんなものが——」

ハリーが袋をヒギンズの鼻先に突き出した。

「ま、待ちたまえ。レイモンド巡查。やにわに入ってきて何をいってるんだ！」

ヒギンズは椅子を飛ばす狼狽えようで立ち上がり、ビニール袋をひったくった。

「運転席のアタッシュボードにねじこんであったんです。常習者に違いありません！」　なおも勢い込むハリーの胸をヒギンズはどんと突き飛ばした。

「どの車のアタッシュボードだか知らないが、こちらのドーセット弁護士に関わりあいのないことで怒鳴りこんでくるんじゃない！　君は礼儀というものを知らないのか！」

声を荒らげ、胸ぐらを掴んで激しく揺さ振った。その奇異なほど唐突なアクションのなかでヒギンズがしきりにハリーへ目配せをしている事実を、美人弁護士の鋭い観察眼は見逃さなかった。

「べ、べ、べ、弁護士？」　ハリーは悲鳴をあげる。

「そうだ、こちらはボストンの弁護士さんだ。どこの

ジャンキーのブツか知らんが、こちらとは一切関係がないんだから、怒鳴りこんでくる奴があるか！」

「ひっ……す、すいませんでした」

腰が抜けそうになるハリーをヒギンズが強引に支えている。

半開きのドアがまた大きく開いた。

「どうしたんだ？ 何を騒いでいる？」

そういいながらヒギンズたちと同じ制服の男が部屋に入ってきた。日焼けした美しい肌をもった男だ。スポーツマンのような鍛えこまれた逆三角形の体格をしている。

組み合っていたヒギンズとハリーが直立不動の姿勢になった。

「保安官っ。いえ、ちょっとその……」

いい淀んだヒギンズは保安官とジャクリンへ交互に視線を移した。それで初めて部屋のなかに誰かいることに気付いた保安官はゆっくりと振り向いた。ヒスパニック系と思われる野性的な彫りの深い顔立ちをしていた。美形だが右頬にやや長めの傷がついている。

彼は一瞬、ジャクリンの美しさにうたれたようだったが、恭しくお辞儀をした。

「お嬢さん、しばらくお待ちください」

保安官はそういうと、二人の首根っ子を掴むようにして廊下へでていった。扉が閉められたため、彼らの会話

はわからない。

ジャクリーンはハリーとヒギンズのパニックを反芻して、その意味を理解しようとした。答えは明瞭である。ハリーがもっていたのは麻薬に間違いなかった。ヘロインか、それともコカイン。少なくともそれにみせかけた粉である。ハリーが口走った車とはジャクリーンのホンダに決まっている。つまりハリーはなんらかの目的でジャクリーンに麻薬所持の罪を着せようとしたのだ。ヒギンズが彼と結託しているのは疑う余地のないところ。彼女が弁護士であるのを知り、おじけづいて、急きょ計画を変更し下手な芝居をうったのだ。

ジャクリーンはサラの事件との関連性を疑わずにはおれなくなった。彼らがどんな理由でそういう芝居をしているのか。点数稼ぎに犯罪をでっちあげる不良警察官は存在する。そのほとんどは味をしめると常習化していくのだが、ガソリンスタンドからの巧みな連携プレーをみていると、その可能性が高い。悪辣なその罠に妹が落ちたことはじゅうぶん考えられる。しかしまだそう決め付けるには早すぎる。この無法が下っぱ警察官の単独のものか、警察ぐるみのもものなのか、それは彼らの上司とおぼしきヒスパニック美男子の出方を見極めるのが先である。

(それにしても到着早々たいした歓迎だわ)

ジャクリーンは内心苦笑した。しかし早々とクライズ

ヒルズの秘密を垣間見れたのは収穫かもしれない。

しばらくしてドアが開いた。入ってきたのはそのヒスパニックただ一人だ。

「お待たせしました」と彼はいった。椅子には座らず、ドアのノブをもったまま、恭しくエスコートする。

「私はこのクライズヒルズ郡の保安官、デビッド・パターソン。もしよろしければ、お宿までお送りいたしましょう」

ジャクリーンは腰を浮かせながら優美な眉を大げさに吊り上げていった。

「あら、もういいんですの？」

「当然です」パターソンは難しい顔をし、吐き捨てる。「部下の不法行為はどうかお許してください。あなたをここに連れてくる必要はなかった。きつく叱りました」

「すぐにでも逮捕されるような雰囲気でしたよ。麻薬か何かで」

二人は廊下にて、並んで歩いた。六フィート弱のジャクリーンの身長より、パターソンはさらに頭ひとつ大きかった。

「麻薬……そう、あれについては部下にも少しは同情すべき余地がある……」

玄関ホールにでると、受け付けの女が来たときと同じように胡散臭い視線をジャクリーンに送ってきた。ハリーもヒギンズもそこにはいなかった。

「とにかくこのクライズヒルズは静かな町なのです。都会のような犯罪とは無縁な場所なのです。ここで生まれて育った部下たちのような人間には犯罪は眼が飛びでるほど珍しく、昂奮するものなのです」

外はもうとっぷりと暮れている。パターソンはホンダの助手席のドアを開けてジャクリーンを促した。自分は運転席に乗り、ハンドルを握った。

「車から大量の麻薬が見つかることなど、年に一度あるかないかです。部下は、とくに若いハリーは舞い上がってしまったのですな。それでまわりがみえなくなり、あなたのいる部屋に飛び込んだ。おかげであなたにたいへん不愉快な思いをさせてしまった。公職につくものとしては失格です」

エンジンがかかり、ホンダは軽やかに発進した。パターソンの穏やかで落ち着いていた語り口にジャクリーンは危うく納得しかけるところだった。パターソンの物腰には自信に溢れて人生を歩んでいる男だけがもつ雰囲気漂っていて、そういうものに女はつい騙されてしまう。しかも彼はハンサムだ。気を引き締めなければならない。あのハリーとヒギンズの行状を思い起し、疑念を蘇らせた。しかしそれをパターソンにぶつけるのはやめにした。ここはひとまず納得した振りをして体勢を建てなおしたほうがいい。尻尾はすでに掴んだのだから。

「そういうことだったら」とジャクリーン。「大目に

みることにしましょう。都会にはもっと悪辣な警官がうんざりするほどいます」

パターソンは繰り返し礼をいった。

「ところでどこへ向ってますの？ 行き先を聴いていませんけど？」

パターソンは子供のようにはしゃいだ笑い声をあげた。どんな人間の心でも和ませるような声だった。

「これは重ね重ねの失礼でしたね、ドーセット弁護士。むろん、今夜のあなたの宿へですよ。このクライズヒルズに一軒しかないホテルです。野宿をする気がない旅行者には選択の余地はないのです」

再び笑い声。ジャクリーンも思わずつられて笑いをユニゾンさせた。街頭の乏しい暗い道を安定したハンドルさばきでパターソンは運転している。その甘い端正な横顔——こちら側からはあの傷は見えなかった——をちらりとみながらジャクリーンは、もしこんな出会いでなければ彼の魅力にひきつけられたかもしれないと思った。

「エド・ローエンには連絡しておきました」その横顔をキリッとさせてパターソンがいった。「彼もホテルに直行するといっていました」

「そうですか……」田舎とはこういうものなのだろう。ネットワークはすべてを網羅している。「妹のことはご存じで？」

パターソンはゆっくりと頷いた。

「この土地で知らないものはいませんよ。不幸な事件でした」

「私は何も知らないのです。昨日、ローエン弁護士から電話を受けて初めて知ったのです。実の妹のことなのに」

ジャクリンはパターソンをみた。彼がサラを逮捕したのなら身内である私に報告すべきだったのではないか。彼女の言葉にはそういった色合が滲んでいた。保安官の短く刈り上げられた黒髪が額に垂れ落ちている。これも黒い瞳が憂愁を湛えている。

「妹さんのことは……」静かな声であった。「エドから聞くのがもっともよろしいでしょう。担当の弁護士でもあるし。私はあくまで取り締まる側の人間ですから、公平さを欠く可能性がある」

ジャクリンは頷いた。紳士的な答えだ。しかしその裏側にどんな顔が潜んでいるのか、まだわからない。そう自分にいいきかせた。

「ここですよ」

パターソンはハンドルを切って駐車場に乗りつけた。けばけばしいネオンサインが点滅している。『ミセス・バルビーのホテル』はホテルよりもモーテルに近かった。平屋で半分離式のチューブのようなコテージが数珠つなぎになっているのだ。

駐車場に一台の車が停まってい、その傍らに白髪の男

が立ってこちらを眺めている。パターソンはその隣に横付けし、フロントライトを消した。

「エド、よく来てくれたね。こちらはドーセット弁護士——」

二人が下りていくと白髪の子、エド・ローエンはまず保安官と握手し、そして自分より背の高いボストンの美人弁護士の手を握った。

「ようこそ、ドーセット弁護士。とんだ災難でしたね」ローエンはパターソンに一瞥する。「残念ながら当地の警察は未熟者が多いのです。このデビットを除いて」

ローエンの皮肉にパターソンは肩をすくめる。

「エド、すべて私の監督不行き届きだ。あなたからもミズ・ドーセットに謝っておいておくれ」

車のトランクから荷物をだし、コテージの側まで運んでいくと保安官は律儀な挨拶を繰り返して、闇のほうへ歩いていった。

「あら、彼、歩いて戻るのかしら？」

「ふむ、別に遠い距離ではない。デビットはハイスクール時代スポーツ万能だったからな。もちろんマイルレースもダントツだった」とローエン。

彼の後ろ姿を最後まで見送っていたジャクリーンの肩を押して、コテージの玄関の階段を昇った。

「手続きはすでにすましています。後で料金をもって

いけばいい。とにかく中でくつろぎたまえ。話はそれからだ」

コテージは必要最小限のものがどうにか揃っている程度だったが、それでかまわなかった。シャワー室は一応清潔だったし、ベッドもスプリングがよく効いている。ローエンの勧めに従い、ジャクリンはまずシャワーを浴びることにした。肌に貼りついたシャツや下着を脱ぐのは不快だったが、すぐに熱い飛沫がそれを弾き飛ばしてくれた。生き返るような気分である。髪も洗いたかったがローエンが待っているので、キャップをかぶり、乳液を全身にまぶして肢体を洗った。勢いよく放射される湯が乳ぶさに気持ちいい。彼女は両手で双つのふくらみをもちあげるようにして、まんべんなく湯を打たせた。あのド助平巡査にまさぐられた気味の悪い感触も綺麗さっぱり流れて落ちていくようだった。

監視される女

すっかり洗い終わると、ジャクリンはざらざらした砂塵のまとわりつきから解放された美肌に手のひらを這わせながら、さっとバスタブの周囲に引いていたカーテンを開けた。レールの溝をスルスルとベアリングが流れ、遮られていた視野が開かれる。流し場にはバスタオ

ルとローブを両手に抱えたエド・ローエンが無表情で立ち尽くしていた。

ジャクリーンはあっと悲鳴をあげるとカーテンの影に身を隠し、顔だけだした。

「これは失礼しました。ドーセット弁護士。必要かと思ひましてね」

ローエンはちっとも取り乱した風もなく手にしていたものを置いてバスからでていった。狼狽を押さえているのか、それとも女体には何の興味を示さない性質なのか。しかし裸身の全貌を目撃したのは紛れもない事実だ。ジャクリーンは口のなかで罵りの言葉を呻きながら、タオルで全身の湯滴を拭いていく。火照った肌に心地よい純白のローブを羽織り、帯を結んだ。さてバストや陰毛はおろか、おそらく媚肉の秘裂さえもみられてしまった男の前にどんな顔をして出ていけばいいのか。女弁護士はもう一度、舌を鳴らしながらバスの半透明の扉を開けた。

ローエンはリビングルームで悠然とソファに座っていた。ジャクリーンは胸もとをしっかりと閉じあわせながら彼の前にラフなローブのうえからでもわかる豊かな腰をおろした。座ると膝上の心細い裾が一層ずりあがり、桃色の腿があらわになる。が、ローエンの視線はそれを黙殺するかのように手元の書類へ向けられていた。

ジャクリーンはテーブルに用意されていたバドワイザ

一の缶を手に取り、栓を開け、ひとくち飲んだ。乾いた身体に冷えたビールが流れ落ちていくのがわかった。

ローエンは仕事に忠実なのだ、とジャクリーンは思うようにした。彼の年齢ではもう女の身体になど関心はないのだ。きっと牛か豚のヌード(?)をみたと同じように見逃してくれるだろう。とはいえ、ローエンの茶色がかった瞳の奥の網膜に自分の乳首の色やヴァギナの構造がシミついているかもしれないとする想像は美人弁護士の羞恥を刺激しないわけにはいかなかった。

ローエンが沈黙を破った。「で、警察の無礼は告訴なさいますかな」

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

刑務所所長スピルマン

ジャクリーンはカウンターの表面に貼りついているメニューを覗きながらサンドイッチとオレンジジュースを注文した。

「サンドイッチは——」娘はだるそうに肩へかかる黒髪をかきあげながら尋ねた。「チーズ、ハム、サラダと

あるけど、どれにします？」

二人の会話は静まり返った店内にいやがおうにも聴こえてしまう。すべての男たちがジャクリーンのややハスキーな声に聞き耳をたてているのだ。

「ハムとサラダをひとつずつ——」

彼女の大人の女のセクシーな声質と肉感的な唇のうごき……まったく世の中にはマブイ女がいるものだ、とこれは男たちの共通の思いである。

注文を厨房へ取り次いでからも、ウエイトレスの娘はジャクリーンの前を離れなかった。緩慢な手つきでカウンターを拭いたり、水を入れ替えたり、この美人弁護士——ジャクリーンの正体を彼女はとっくに知っているのだらう——との会話のきっかけを待っているのは明らかだった。全身を好奇心の塊にしている客たちを尻目に、無理なく(?) 昨日の夜からクライズヒルズの話題を独占している噂の主に近付ける役得にかすかな優越感を感じているのだ。

ジャクリーンは内心苦笑しながら、その努力に報いてやることにする。

「新聞はないかしら？」

娘の瞳がきらきらと光った。「新聞ですか？ どの新聞がいいのかしら？」

「ここの土地でだしてるやつ」

ジャクリーンはエド・ローエンから資料として渡され

た例の切り抜きの地元紙の名前をいった。とたんに、テーブル席のティンガロンハットの運転手が椅子を蹴飛ばすように立ち上がった。彼の手にもたれているのが、その新聞だったのである。ジャクリーンは緊張して丸椅子の上で座りなおし、助けを求めるかのようにウエイトレスの顔をみた。彼女はヤレヤレといった表情をあらわにしている。せっかく独占していたスターとの会見を邪魔されるのは心外だとばかりに膨れっ面だ。

男はジャクリーンの傍らに立った。強いマスタードの臭いがプンプンと漂ってくる。男はシャツを肩までまくりあげ、剥き出しになっている丸太のような日焼けした腕を、彼女の鼻先をかすめるように差し出すと、前に置かれたコップをちょこんとつまみ、横に移動させた。ジャクリーンの腕ほどもある指のなかのコップはショットグラスのように小さくみえる。男はそうしてカウンターに余地をつくると、そこへどさりと新聞を広げたのだった。おどろおどろしい大活字が品なく並べ立てられた紛れもない例の新聞。

「お嬢さん——」強いアルコールに漬れたような声が耳元に轟いた。「俺はもう読み終えたから譲ってやるよ。だが、たいしたことは載ってねえ。昨日までの退屈なクライズヒルズの糞話ばかりだ。草フットボールのチアガールのペチコートの色が何色だとか、三十三歳の未亡人が二度目の結婚をした相手は変質者だったとか、そ

んな話ばかりよ。この新聞が面白くなるのは明日からだろうよ。きっと一面にあんたの顔写真がデカデカと載るぜ。スリーサイズの数字つきの履歴書と一緒によ。このクライズヒルズは遠来の客を厚くもてなすのが、昔からの習慣だからな」

男はそういうと喉に疾患があるような奇妙な笑い方をした。

「どうでもういいことだが、この店のサインドイッチは最低だぜ。ありゃ豚の餌だ。次からはホッドドックかフライドチキンにするんだな」

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

窓辺のヌードショー

綿で注射の跡をよく揉みこみ、少量の軟膏を塗った。血はすぐに止まって、シミよりも小さな患部はかさぶたも出来ずに白肌へなんら痕跡もとどめないだろう。痛みはかすかに感じるかもしれないが、大事な会見の席で昏倒する失態を演じたパニックにそれどころではなく、落ち着きを取り戻したときには傷はもう癒えている。

スピルマンは素早くジャクリーンの衣服を直していった。白い乳ぶさには未練が残るがブラジャーのカップに押し込んだ。その時、触れた肉の柔らかさときたらどうだ。軽く掴んだだけなのに指はふっと沈み込み、そして形を取り戻すように跳ね返してくる。ほんのりとした体温とともに理想的な丸みの感触がいつまでも残っているのだ。

ブラのストラップをしっかりと幅をもった——しかし怒っている印象はない——肩へとかけ、さらにスリッパも元どおりにした。ブラウスのボタンをはめていくと、女弁護士の安定していた吐息がやや乱れだした。覚醒が迫っている。ジャクリーンのあまりの美しい肉体にうっとりしているうちに、少し時間を取りすぎたようだった。黒のジャケットを着せて、ブロンドをほどいた。滑りこみセーフであった。

スピルマンは彼女の大柄な身体を横抱きにして、ソファに寝かせた。彼女の長い睫が震えたかと思うと、薄目を開けた。涙に潤んだブルーの瞳がまだとろんとしている。何度か緩慢にまばたきをしたのち、眼の前にスピルマン所長の顔があるのを確認したようだった。

「わ、わたし……」

ジャクリーンは喉に何かつまっていたようなくぐもった声を発した。

「……いったいどうしたのかしら……」

「突然、倒れられたのです」とスピルマンは微笑みながらいった。

「倒れた？」 ジャクリーンはまだ事態が飲み込めていない。

「たぶん貧血だと思いますよ。でも顔色も戻ってきたし、気を失っていた時間も二三分だったから、もう大丈夫でしょう。念のために救急車を呼びましょうか？」

「いえ結構——」

ジャクリーンは慌てていった。そしてふと気が付いて両手を胸もとにもっていき、襟ぐりを押さえた。スピルマンに疑惑を抱いたというより、女の本能的な行動だった。

「失礼しました。こういった場合、首回りを楽にするのが常套だと思いましたが、ボタンをひとつ外してしまいました。許してください」

丁寧に詫びて、紳士面をつづける。予想どおりジャクリーンは恐縮しきりであった。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

煉獄での面会

次の日の午後、ジャクリーンはホンダをクライズヒルズ刑務所に向って走らせていた。ジョージ・スピルマン所長から直々に電話があり、面会時間をセッティングしてきたのだ。迎えに車を送るとまでいわれたが、それは断った。クライズヒルズ刑務所までの道は他所者でも間違うわけのないような単純な道順である。

ジャクリーンはさっそくエド・ローエンと連絡を取り、向こうで落ち合う手筈を整えた。彼はサラの担当の弁護士でもあるのだし、立ち合わせるのは不思議ではない。それにそれがスピルマン所長がつけた唯一の条件でもあった。

『とくに必然性はないのですが、最初から完全自由化というのは役人の世界ではありえないことなのです。妥協点をみいだすことで彼らはプライドを保とうとする。滑稽にみえるかもしれませんが、なんととっても急なことですからご了承ください』

スピルマンの理屈には筋が通っていた。それに彼の落ち着いた声でそういわれると、抗しがたい説得力が生まれるのだ。ジャクリーンは彼のあの深い紺碧の瞳を思い出した。スピルマンには人を虜にさせる何かがある。とりあえず警戒しながらも、それは認めないわけにはいかなかった。

今日のジャクリーンは昨日と同じ服装であった。黒の

スーツと白のブラウス。大量に着替えをもってくる余裕はなかった。これは旅行ではないのだ。しかし下着は昨日と違っている。ミセス・バルビーが今朝一番で届けてくれたものを身につけている。幸運にもそれはミセス・バルビーが長い間使用していたお古ではなくて、新品であった。知り合いの衣料店を叩き起こして——日曜だというのに！——買ってきたものだとして親切ごかしに彼女は鼻を蠢かせるのだった。もっとも胸を張ったわりにはサイズはあっていなかった。小さすぎるのだ。ブラはハーフカップよりもまだ小さく、彼女の乳肉はほとんど溢れだしている。乳頭など乳首がやっと隠れる程度で、乳輪は日の出の状態であった。きつくぐっと締め付けてくるので、注意深い観察者がいればジャクリーンのバストの位置は昨日と違ってややあがっているのを発見できるだろう。

「あんたのようなデカパイはかえってこういうほうがいいんだよ！」

ミセス・バルビーの意見だが、ブラウスが白、しかもこの気温ではノーブラで過ごすわけにもいかない。さらにパンティに至ってはコパカーナのビーチで若い娘が付けているようなTバックときていた。前は際どくハイレグカットで鼠蹊部が丸見え。深い毛叢をしまいこむのに苦労するザマである。尻の谷間にぴったりと食い込んでくる生地感触は慣れるまで気が散ってどうしようもな

いだろう。スカートを付けてもスースーして、ノーパンのように心許ない。今日は恋人とのデートでもなくプールに泳ぎに行くわけでもない。刑務所へ妹の面会に行くのだ。ジャクリーンはミセス・バルビーに文句のひとつもいうべきだろうと思ったが、かといって他にはどうするわけにもいかないの、明日になったら自分で買い替える誓いをし、彼女には礼をいっておいた。

クライズヒルズ刑務所はアイク通りを東に向って小一時間も走り、小高い丘のうえに登ったところにその威容をそびえさせていた。高いレンガ色の塀が全貌を隠している。塀の上には有刺鉄線が張り巡らされ、その向こうに巨大な投光器とマシンガンが備え付けられた物見やぐらがみえた。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

赤毛の協力者

「サラ、教えて頂戴。あなた、本当にコカインなんかに手を出したの？」

ジャクリーンもまともな返答を期待しているわけではな

かった。監視の中の面会なのだ。サラの状況が差し迫っているものであればあるほど、自由な発言などありえない。彼女のおどおどした様子——サラが、あのサラ・ドーセットがこんな姿をみせるなんて、ありえるだろうか！——からみても周囲に気兼ねしているのは明白なのである。しかし機転の効くことでは俊才の姉以上であった彼女。なんらかのサインを出してくれるのではないだろうか、ジャクリーンはそう思ったのである。

「ジャッキー、御免なさい。私、魔がさしたとしかいえないわ。あなたのことだから裁判記録はもう読んだでしょう？ 起訴事実はその通り。私は法を犯してしまったのよ」

サラは慎重に言葉を選んでいるようだった。ジャクリーンも頭脳を急回転させて彼女の言葉と表情の動きを反芻し、分析する。残念ながら暗号めいたものは見当らなかつた。いや、待てよ……ジャクリーンの頭にパッと閃光がきらめいた。ひょっとするとその可能性はある！

「いい子だから落ち着くのよ。あなたがあるコミュニケーションの取材をしていたっていうのは、どうなの？ 本当なの？」

「ええ、それはその通りだわ。姉さん。今から思えばそれがすべての始まりだった。一生の過ちのね」

「そう。だんだんわかってきたわ」とジャクリーンは努めて暗い表情をしながらつぶけた。「で、そのリーダ

一の男を愛してしまったのね」

「羞かしいわ、私。どうやら我々姉妹には男をみる眼がないようね。ジャッキー」

サラの言葉にジャクリーンは微笑みを浮かべ、ローエンを振り返って解説した。

「私は半年前に離婚したのです。妹はそれをいっているのですわ」肩をすくめるローエンにウインクしながらジャクリーンはサラをみつめ直す。「これから私のする質問には正直に答えなければ駄目よ。それじゃなきゃ、ドーセット家はあなたの帰ってくる場所ではなくなるかもしれない。いい？ あなたは麻薬を吸引したことを認めている、そして有罪の票決を甘んじて受け入れている、控訴の意志はない——これはみんな、あなた自身による判断なのね？ 誰に強制されたものでもないのね？」

サラはしきりに思案を巡らせているようだった。唇を舐め、ローエンの表情を盗みみ、そして口を開いた。

「すべて私の意志だわ。私を罪を償うつもりよ。ジャッキーが弁護士だったとしてもこの結果は変えられなかったと思う」

その答えを聞いて、ジャクリーンは大きく溜息をついた。肩をがっくりと落とした。この落胆の演技を看守たちやローエンが見破らないことを祈りながら。

「残念ね。でも仕方がない。終わったことをあれこれい

っても意味ないわ。現在の話をしましょう。刑務所暮らしはどう？ うまくいってるの。不都合はない？」

「人権派のあなたには意外でしょうけどね、ジャッキー、ここでの暮らしは快適よ。みんな優しくしてくれるわ。不思議なことによく眠れるの。罪を悔い改めたことですっきりしたのかもしれない。ジャッキー」

「まあ最近の刑務所が改善されてきているのは認めるけど。あなたは幸運だったようね。優良な施設に入れたことを感謝すべきだわ。それでは不足しているものもないのね？ 下着や衣類は間に合ってるの？」

「心配しないでいいわ、姉さん。新品のを買えるから」

「そうそう、スピルマン所長に会ったわ。大変いい方ね。今日の面会をセットしてくれたのもあの人だわ。何十年来の慣習に反してね」

スピルマンの名前を出してもサラの表情はピクリとも動かなかった。

「……私は残念ながら点呼や朝礼の時しか会わないけど。女性受刑者の間では人気者よ。ジャッキーは幸運だったようね。それに……」とサラは言葉を短く区切った。「今回のジャッキーの男をみる眼は正しかったようだわ。私、安心した。スピルマン所長に眼をつけるなんて」

二人の姉妹は声をあわせて笑った。その彼女たちに女

看守が無情の宣告をする。

「面会時間あと一分」

この章の残りは有料本編でお読みください。

#####

炸裂する空手チョップ

そこへ折れていくと、急に薄暗くなった。木立が高く迫り出して半アーケードの感じになっている。熱気がこもり、ジャングルのような蒸し暑さだ。

ジャクリンはあごに滴る汗を拭った。肩にも胸もとにも二の腕にも、甘い体臭を含んだ生汗が滲みだして、細かい羽虫たちを惹きつけた。勾配がきつくなり身体を前傾にして、一步一步踏みしめるように歩かねばならなかった。こういう道は不気味だが、かえって安全なのかもしれないと彼女は思った。何しろ人一人が通るのがやっとの狭さである。正面からでも背後からでも、攻撃してくる敵は単独行動を取らざるをえないのだ。両側の茂みに隠れていて、わっと襲いかかる？ いやいや、この藪では一歩動きだせばすぐに音を立ててしまうだろう。身構える準備さえできれば、恐くないのだ。自然の防犯

装置に取り囲まれているとっていい。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

ジャクリーン、逮捕

グラント夫人はきまり悪そうに謝罪した。

「御免なさい。ちょっと急な用が出来たので遅くなりそうなのよ。変わりはない？ まだ変態電話は来ていないわね？」

ジャクリーンは手短かに彼女と別れてから起こった経緯を報告した。セクシーな声を持つ赤毛の年増美人は呆れたように口笛を吹いた。

「あなたってお転婆ねえ。驚いちゃうわ、まったく。もしものことがあったらどうするのよ！」

「フフ、御免なさい。でも収穫があったんだから勘弁してください。これで奴らを追い詰めることが出来るでしょう」

たしかにその通りだが、と、モニカ・グラントは二の句が告げないようである。彼女にしてみればあのブロンド美人とアクション映画まがいの空手の達人とがどうに

も一致しないのだった。いくら腕に覚えがあるといっても、そんな電話にノコノコ誘い出されていくなんても無鉄砲にもほどがある。

ジャクリンはこれ以上お説教されてはかなわないと、話題を変えた。

「……写真二枚とメキシコ酒場の『アミーゴ』。叩けばきっと尻尾を捕まえられるわ」

「ちょっと待って！」モニカは慌てて叫んだ。「勝手な真似はしないで頂戴よ。お願いだから一人で乗り込んでいくなんていわないでね、ジャクリン。あそこは胡散臭い場所だわ。裏では売春もやってるし、人身売買に手を染めている疑いもあるの。軽率な行動は赦されない……」

「人身売買？」ジャクリンは聞き返した。

「そう、中米から南米、遠くはアラブ世界へ通じるルート of 窓口よ。もちろん向うからアメリカへ貧しい女性たちを連れ込んでくることもあるけど、『アミーゴ』はその逆が本業。白人女を調達して大金持ちのハーレムへ送り込む。アメリカを憎んでいる民族は掃いて捨てるほどいる。顧客には困らないのよ」

「そういう組織とクライズヒルズ刑務所とが結びついている可能性がでてきた……。ミセス・グラント！　こうしちゃいられないわ。これから二人で行ってみましょう！」

「駄目よ、駄目。女だけで行くなんて正気の沙汰じゃない！　うちの組織から応援を呼ぶから待って頂戴。屈強なボディガードを二人くらい連れて乗り込みまなくっちゃ」

「どのくらいかかります？　その遅しきハンサムボーイがクライズヒルズに到着するのは？」

「うーん——三日、いや二日で準備できると思う」

「そんなに待たなきゃならないの！」　ジャクリーンは額に拳をコンコンと打ちつけた。「気が遠くなりそうだわ……」

「妹さんを惨い目に合わされているあなたには耐えられないかもしれない。しかしこれは妹さん一人の問題だけではないのよ。他にもたくさんの犠牲者が、そしてこれから犠牲になろうとしている女たちの問題でもあるの。迂闊に動いて察知されたらそれこそ何もかもパーでしょう。慎重な計画が必要よ」

モニカの主張が全面的に正しい。ジャクリーンは心を落ち着けて彼女の指示に同意した。

#####　この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

肉体の吟味

婦人警察官の表情が初めて感情の起伏をみせた。口元が頬のほうへひきつり、嘲笑を浮かべたのだ。ジャクリーンのプッシーに没入されていた彼女の人差し指と中指は、湯気をあげんばかりに熱い樹液に濡れそぼっている。あえて言葉を発せず、それをジャクリーンにみせつけるだけで、彼女は多大な恥辱を煽っているのだ。

「そこへお座りっ、牝豚！」

この章の残りは有料本編でお読みください。

#####

以下は有料本編でお読みください。

#####